

「阪神大水害の教訓」

兵庫県 関西学院中学部 3年 ^{みちたに}道谷 ^{まさき}将貴

僕の住む神戸市東灘区は、今から77年前1938(昭和13)年、阪神大水害という大きな土砂災害を経験している。今から、20年前の阪神・淡路大震災と並ぶくらいの自然災害として、この水害は地元で語り継がれている。阪神大水害とは、1938年7月3日から5日にかけての3日間、総雨量が461ミリにも達し、今の神戸市や阪神地区に大きな被害をもたらした水害のことだ。亡くなった方が715人、流された家が5732戸にも及び、そのうち僕の住む東灘区では48人が亡くなり、352戸の家が流されたそうだ。この大水害で家の近くの石屋川や区を中心を流れる住吉川をはじめ六甲山系の川は氾濫して流域に流れだし、大きな被害を与えた。この水害の様子は、当時、住吉川沿いの「倚松庵」という家に住んでいた谷崎潤一郎が「細雪」という小説の中で詳しく描写している。

今回、この作文を書くにあたり、夏休みに、東灘区に4カ所ある阪神大水害の記念碑をすべて回ってみることにした。一つ目は、住吉川の上流、落合橋の東の方に立つ、高さ2メートルほどの「水災記念碑」で、台座の右脇に水害の最高時の洪水の水位が刻まれている。二つ目は、住吉学園の中にある「流石碑」だ。これは水害で流れてきた30トンの巨石を利用したもので、石碑の高さが洪水の時の泥水の高さを示している。この碑を見たとき、重さ30トンのこんな大きな石が流れてくる水害に怖さを感じてしまった。三つ目は、甲南小学校にある甲南学園創設者の平生釦三郎「常二備へヨ」の碑だ。そして、最後は、阪神青木駅の北にある春日神社の境内にある「水害記念碑」で、水害の濁流で流された巨石を利用して作られている。この四つの碑を巡ったことであらためて当時の水害の怖さを感じることができた。

また、1925(大正14)年生まれ今年90歳になる近くに住む祖父はこの水害を経験している。その時の様子を祖父から聞いてみた。祖父は当時13歳で、大阪の学校に通っていた。授業中に、先生が雨が激しくなるので、神戸の方から通っている生徒はすぐに帰るように言われ、阪神電車に乗って帰ろうとした。電車に乗っていると、だんだん雨が激しくなり、尼崎を越え武庫川の手前あたりまで来たときに電車がとまってしまった。電車は動く気配もなく、仕方がないので武庫川から御影まで歩いて帰ったけど、途中、夙川、芦屋川といった大きな川が氾濫しかかかっていて、何とかそれらの川の橋を渡って、家にたどり着いたら深夜になっていたそうだ。祖父の家は何とか流されずにすんだが、通りへだてた隣の地区は家が水につかったり、中には流されてしまった家もあったそうで、道には大きな石が転がっていたという。この祖父の体験を聞いて、阪神大水害の恐ろしさを目の当たりにしたような思いになった。

僕は、水害の記念碑を巡ったり、祖父の話を知ったりしたことで、本で読んだだけでは伝わってこない阪神大水害の実際の様子を理解できたように思う。阪神大水害のあとも、僕の住む地域にはこれまで何度も集中豪雨による水害がおきている。僕の住む神戸市東灘区は六甲山と大阪湾という山と海にはさまれた街である。山側から海側へと坂道になっていて、高低差の大きな地域となっている。そのため、一度大雨になると、急斜面を駆け下りてくる雨水と土砂による川の氾濫で、街は大きな被害を受けることになる。

僕は、まだ、集中豪雨で川が氾濫したということまでは経験していないが、街の歴史を振り返ると、今後、いつこのような水害がおこるかかわからない。祖父は阪神大水害のとき、奇跡的に家は無事だったというが、将来おきるかもしれない水害で自分の家が大丈夫だという保障はどこにもない。むしろ流される危険性の方が高いだろう。今住んでいる家は一戸建ちの家なので「流石碑」のような30トンの岩が流れてきたら、建物はひとたまりもないだろう。最近では、水害をはじめ、さまざまな災害が起きそうとき、避難するよこという呼びかけがいろいろなところから知らされる。こうした避難の呼びかけがあればあわてることなく、落ち着いて避難場所へ移動することが大事だと思う。避難する場所も大きな岩や高さのある鉄砲水が流れてきてもビクともしない頑丈で高さのある建物が安全なので、そういった場所を普段から確認しておき、いざという時にはそのように行動し、自分の身を守りたいと思う。